

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 17 日現在

機関番号：35309

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18H01092

研究課題名(和文) 言語障害児・者を対象とした包括的言語検査に基づいた認知神経心理学的評価基準の開発

研究課題名(英文) Development of cognitive neuropsychological evaluation criteria based on comprehensive language tests for children and persons with language disorders

研究代表者

種村 純 (Tanemura, Jun)

川崎医療福祉大学・リハビリテーション学部・教授

研究者番号：90289207

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,600,000円

研究成果の概要(和文)：包括的言語検査(文理解検査、単モーラ・単語聴覚的理解検査、呼称・動作呼称検査、まんが説明、復唱検査、音読・書取課題)について健常者データの収集を完了した。対象者は4歳から17歳までの小児278名、成人は164名であった。ほとんどの課題で小学生段階で天井効果がみられた。文の聴覚的理解および読解では二項および三項の他動詞文のかき混ぜ語順課題で健常成人でも誤りがみられた。まんが説明課題では、延べ語数、各語の品詞など語彙素分析を進めた。単語の聴覚的理解では小学校低学年で心像性効果が認められた。単語読解では、小学校低学年では漢字読解がカタカナおよびひらがなの読解に比べて高成績であった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究で作成される検査は、児童、生徒、青年、高齢者に対応できる包括的な検査を作成する点において、本邦初であるばかりでなく、世界でも稀である。課題間で異なる刺激を用いても単語属性値が近似する単語を選択し課題間の難易度を統制できるようになる。さらに、指導やリハビリテーションにおいて使用頻度や心像性の高い単語を選択することにより、実用性があり容易な課題から難度の高い課題へと教材作成が可能である。多数の臨床家が評価できる実用的な検査となり、小児の失読失書、失語、発達性読み書き障害、特異的言語障害の診断評価が可能になる。一方、成人失語症例や、認知症の病態を詳細に分析することが可能になる。

研究成果の概要(英文)：We completed the collection of data on healthy subjects for the comprehensive language test (sentence comprehension, monomora and word auditory comprehension, noun and action naming, explanation of comic strips, repetition, reading aloud and writing). The subjects were 278 children aged 4 to 17 years and 164 adults. In most of the assignments, a ceiling effect was observed at the elementary school level. Errors occurred in auditory comprehension and reading comprehension of sentences in the stirring word order task of binomial and ternary transitive verb sentences even in healthy adults. In the explanation of comic strips, we proceeded with lexeme analysis of the total number of words and parts of speech of each word. In auditory comprehension of words, an imageability effect was observed in the lower grades of elementary school. In word reading comprehension, the lower grades of elementary school showed higher grades in kanji reading comprehension than in katakana and hiragana.

研究分野：臨床心理学

キーワード：心像性効果 天井効果 語彙素分析 項目分析 標準化 因子分析

1. 研究開始当初の背景

現在、言語障害児を対象とした読み書きを含めた包括的言語検査はまだない。成人用検査としては標準化された検査は存在するが、近年の語彙特性研究の成果を反映しておらず、地域性に偏っている。現代に即しておらず、根拠に基づいて作成されていない。そこで本研究の目的は、地域別に健常者のおよび言語障害児者の検査データを収集し、そのデータに基づき現代に即しかつ地域性に偏りのない、小児から高齢者までの言語障害児者を対象とした包括的な言語検査を作成することである。言語障害児者は、小児失語例、小児失読失書例、発達性読み書き障害例、成人や高齢者の失語症例や失読失書例などである。これらを通して人口の約8%存在すると推定されている言語障害児者の社会参加に貢献する。近年、情報化社会の進展により言語による情報の取得・発信の重要性が増している。しかし、少なくとも700万人存在する(日本失語症学会全国実態調査委員会、1995)と推計されている言語障害児者は、言語情報の取得や発信が困難なために、積極的な社会参加が難しいことが多い。言語障害には第脳損傷による失読、失書、発達性読み書き障害と、言語様式すべてに障害の見られる失語症、先天性と考えられる特異的言語障害などがある。文部科学省が重要課題の一つとして掲げている「共生社会の形成」を実現させるためには、彼らが社会参加できるように支援することが重要であると思われる。しかし、診断評価の技術に関して問題がある。言語障害児者の診断評価のためには、小児から高齢者に対応でき、地域性に左右されず、現代に即した文字言語と音声言語を網羅した、標準化された検査が必要に思われる。ところが、成人失語症者を診断評価するために標準化されている唯一の検査である標準失語症検査(SLTA: Standard Language Test of Aphasia)は、40年前に作成されているため古く、現代にそぐわないばかりか地域性に関して偏りがある。具体的には、電話は黒電話、薬は現在では用いられることの少ない薬瓶の絵が使われていたり、多くのマンションでは見ることのない襖(ふすま)の呼称が求められている。そして沖縄ではみることのない鳥居や孟宗竹などが、北海道ではなじみの少ない鉄橋などの単語が使用されている。また成人用SALA失語症検査(Sophia Analysis of Language in Aphasia)は、元となっている健常データの対象者が10-20人と少なく、標準化もされていない。一方、国内外を問わず、小児失語症や小児の失読失書を対象とした検査はまだ作成されていない。さらに児童用である発達性読み書き障害の読み書きに関する簡便な検査はすでに我々によって出版(「小学生の読み書きスクリーニング検査」宇野ら、2006)されているが、中学生は対象でなく標準化されていないという問題がある。また、日本語の特異的言語障害に関する単語から文レベルまでの検査は存在しない。このように、あらゆる年代を対象とした評価項目を網羅した包括的言語検査は日本にはまだ存在せず、包括的な言語検査の作成が重要なニーズとなっているのが現状である。本研究では、このニーズに対応した包括的検査を作成する。

2. 研究の目的

児童、生徒、青年、高齢者に対応できる包括的な検査を作成する。課題間で異なる刺激を用いても単語属性値が近似する単語を選択し課題間の難易度を統制できるようにする。小児の失読失書、失語、発達性読み書き障害、特異的言語障害、成人失語症例、認知症の病態を、すべての言語様式において単語属性を制御した刺激や現代に即した刺激を用いることにより、詳細に分析することを可能にする。

3. 研究の方法

(1) モーラの異同弁別課題: 1モーラずつ1ペアを聞いてもらい(ex. /ta・/da/)、同じ音かどうか x の記号を指さしてもらい。刺激素材は有声音 - 無声音、構音点、構音様式が相違した子音と/a/、/e/を組み合わせた。

(2) 単語の聴覚的理解: 1単語ずつ音声を聴取し、絵画4枚から該当する絵を選択してもらい。絵画呈示は選択肢となる4枚を同時に呈示し、選択させる。

(3) 単文の聴覚的理解力・視覚的理解力(読解力)検査: 失語症者の統語的な理解を測定するために、文理解診断テストを用いる。文の構造は、「自他性」は自動詞と他動詞とし、「語順」は正順とかき混ぜ、「態」は能動態と受動態、「項」は、1項から3項までとした。失語症患者のテストへの負担を軽くするために、12文のみを診断に使用した。

(4) 呼称: 「これは何ですか」と絵を呈示し、制限時間10.0秒反応の正誤を記録した。目標語以外の表出時は、ヒントとして目標語の語頭音を言う(語頭音呈示後、制限時間10.0秒)。

(5) 動作呼称: 反応の時間を計測する。言語反応は、原則すべて記録する。目標語以外の言語反応も記録する。動詞の部分のみを評価する。

(6) 非語復唱: 対象者は音声テープで提示した非語の刺激音を聞き、復唱を行う。2~3モーラは各2個、4~6モーラは各3個、7~8モーラは各2個の合計17課題の非語を復唱してもらう。

(7) まんがの説明：情報の伝達量、効率性・流暢性、オチの説明を評価することを目的にまんがの説明課題を用いる。馴染みのある話（鶴の恩返し）、簡単なストーリー（犬の散歩）、最後のコマの理解により前のコマの理解が必要なもの（サッカーボール）の3課題である。採点は使用語彙、文形式、誤反応、談話評価（落ちの表現）について評価する。

(8) 音読：漢字単語8項目、漢字非語8項目、ひらがな単語およびカタカナ単語各8項目を文字提示し、音読してもらう。反応時間および言語反応を記録する。

(9) 単語の読解：漢字、カタカナ、ひらがな単語各5項目を文字提示し、同時に絵カードを提示する。単語および単文に該当する絵を選択する。反応時間を記録する。

(10) 書称：漢字単語5項目およびカタカナ単語各3項目の絵を提示し、名称を書いてもらう。反応時間および言語反応を記録する。

(11) 書取：漢字単語5項目、ひらがな単語5項目およびカタカナ単語3項目を聴覚提示し、書いてもらう。反応時間および言語反応を記録する。

4. 研究成果

(1) 単文の聴覚的理解・読解検査日本語を母語とする成人被検者が58名。学生は、18歳7カ月から26歳8カ月で、平均年齢は、20歳4カ月(SD=1歳7カ月)である。女性が30名、男性が28名であった。かき混ぜ文のみ聴覚的理解で60%台、読解で80%台の正答率であった。かき混ぜ文に誤りが出現し、その誤りは聴覚的理解に多く、読解に少なかった。聴覚的理解では読解に比べ助詞による格関係の解読が行われず、正順文として理解する、という文型と聴覚視覚モダリティーの交互作用が認められた。この結果は、かき混ぜ文が統語処理の障害を検出する上で有用であり、かき混ぜ文以外で誤る場合には統語処理障害を反映していることを示した。

(2) 呼称および動作呼称 全参加者は194名であった。また男女比は男性65:女性129であった。年齢層では、18~39歳の若年層が約半数を占めていた。呼称の単語ごとの正答率と反応時間は、すべての単語において、正答率は90%以上だった。正答率100%の単語は14語であり、1秒以内に反応を開始しており、名称一致度は高かった。動作呼称の単語ごとの正答率と反応時間は、正答率100%の単語は9語(たべる、うたう、かぶる、なめる、はく、きる、しぼる、ある、かく)であり、名称一致度は高かった。呼称も動作呼称も健常者ではほぼ誤らないことが分かった。したがって、この両課題で誤れば喚語障害を表すことになる。動作呼称では正答率の低い語がみられたが、名詞に比べ絵で動作を表すことがやや困難であることを示している。

(3) 非語復唱課題 152名のデータを使用した。モーラ数が増えるにつれて、正答率が下がった。50%未満の平均正答率であった項目が3語(7モーラ非語1語、8モーラ非語2語)あった。年代が上がるにつれ、平均正答数が減少する傾向にはあった。非語復唱では、モーラ数が増えることと困難であることが示された。モーラ数が音韻処理能力をよく反映することが分かった。また、また70歳代では聴覚入力を含めた音韻処理能力の低下が顕著であることも明らかになった。基準値として貴重なデータである。

(4) 「まんがの説明」3種の課題(鶴の恩返し、犬の散歩、サッカーボール)につき164名(成人158名、中学生以下6名)の健常協力者の発話データを収集した。各協力者の発話に現れた延べ語数、異なり語数、各語の品詞、動詞、形容詞、助動詞の活用型、活用形を分析する。これにより、課題ごとの健常者の発話語数、その課題に重要な語を決定する。まんがの説明では反応の分量が膨大であり、発話語数、品詞、活用に関して基準となるデータが作成されれば、極めて貴重である。今後、詳細な分析を進める必要がある。また、流暢性、錯語等の誤反応に関する症候学の観点に立つ評価表の完成も待たれる。

(5) 単語の聴覚的理解課題 16歳以上の156名について分析を行った。高心像語は全例10/10語正答であった。低心像語は7.96/10(SD=0.21)正答であった。誤り方としては、意味的に関連した刺激への誤りが6/7名、無反応が1/7名であった。単語の聴覚的理解では心像性効果が明らかになり、意味的関連の誤りとともに意味性の要因が大きく関与することが明らかになった。また、単語の読解では、意味的な誤りが認められた。

(6) 単語の読解課題 16歳以上の156名について分析を行った。その結果、ひらがな単語とカタカナ単語は全例5/5語正答であった。漢字単語は、4.99/5(SD=0.11)正答であった。音読ではひらがな、カタカナでは全問正答で、この問題に誤れば障害であると評価される。漢字単語での音読では、文字・音韻対応(音読みと訓読みの混乱も含め)および形態的類似性に基づく誤りが出現した。漢字非語の音読では音読みが多いが、一部訓読みも交えた反応が認められた。今回の結果を踏まえて正答の範囲を検討する。

(7) 音読課題 ひらがな単語では16歳以上の156名について分析を行った。全例8/8語正答であった。カタカナ単語では16歳以上の156名について分析を行った。全例8/8語正答であった。漢字単語では16歳以上の156名について分析を行った。156名の平均正答数は7.87(SD=0.42)語であった。誤反応はLARCエラー、無反応、視覚性錯読、「虫眼鏡」を誤った1名は「双眼鏡」という視覚性意味性錯読、音読み語の訓読みであった。漢字非語では16歳以上の156名について分析を行った。平均正答数は5.21(SD=0.90)であった。音読みではなく訓読みが混じる誤反応が多かった。仮名の音読では健常者に誤りは出現せず、漢字の音読で少数ながら多様な誤りが出現することが分かった。

以上、本検査は聴覚的理解、読解、発話および書字成績における音韻、意味、統語変数の関与を評価するために作成した。健常者においても語彙および統語変数の効果が認められた。今後年

代別、地方別の成績の相違を比較し、標準化を完成させる。

引用文献

日本失語症学会失語症全国実態調査委員会：失語症全国実態調査報告、失語症研究、失語症研究15 巻 1 号 p. 83-96、1995

日本高次脳機能障害学会Brain Function Test委員会：標準失語症検査標準失語症検査（改訂第2版）（Standard Language Test of Aphasia: SLTA）新興医学出版社、2003

藤林真理子・長塚紀子・吉田敬・David Howard・Sue Franklin・Anne Whitworth：SALA失語症検査S A L A失語症検査 - Sophia Analysis of Language in Aphasia -、株式会社エスコール、2004

宇野彰,春原則子,金子真人,Taeko N.Wydell：「小学生の読み書きスクリーニング検査」宇野ら, 2006改訂版 標準読み書きスクリーニング検査（STRAW-R）[インテルナ出版](#)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計40件（うち査読付論文 29件 / うち国際共著 4件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 種村 純	4. 巻 37
2. 論文標題 高次脳機能障害の言語異常のマネジメント	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 JOHNS	6. 最初と最後の頁 630-632
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大森 美代、宇野 彰	4. 巻 63
2. 論文標題 言語障害特別支援学級における発達性読み書き障害2例への聴覚法指導の試み	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 音声言語医学	6. 最初と最後の頁 43-49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5112/jjlp.63.43	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高崎 純子、春原 則子、宇野 彰	4. 巻 63
2. 論文標題 小学生の発達性読み書き障害児と通常学級在籍児のカタカナ非語書取の分析	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 音声言語医学	6. 最初と最後の頁 7-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5112/jjlp.63.7	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宇野 彰、猪俣 朋恵、小出 芽以、太田 静佳	4. 巻 41
2. 論文標題 ひらがなはいつまでにどれだけ習得されるのか？ ひらがな習得に関するレディネス	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 高次脳機能研究	6. 最初と最後の頁 260-264
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 浜田 千晴, 宇野 彰	4. 巻 62
2. 論文標題 小学1年生における促音、拗音、長音、撥音の表記に関するひらがなの音読と書字の習得度および影響する認知能力	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 音声言語医学	6. 最初と最後の頁 156-164
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5112/jjlp.62.156	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 池尻 幸司, 橋本 幸成, 水本 豪, 宇野 彰	4. 巻 62
2. 論文標題 仮名非語の音読において語彙化 逐字読み 語彙化の症状パターンを示した音韻失読例	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 音声言語医学	6. 最初と最後の頁 91-98
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5112/jjlp.63.7	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 春原 則子	4. 巻 69
2. 論文標題 「聞く・話す」のメカニズムとLDへの支援	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 教育と医学	6. 最初と最後の頁 380-386
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 遠藤 俊介, 沢 千晶, 狐塚 順子, 石田 隼一郎, 栗原 淳	4. 巻 18
2. 論文標題 小脳腫瘍摘出術前後に言語・認知検査を実施した4症例 小脳性無言症候群を呈した小児の2症例の経過を中心に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 言語聴覚研究	6. 最初と最後の頁 315-323
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11477/mf.6001200349	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大森 史隆, 水本 豪, 橋本 幸成	4. 巻 63
2. 論文標題 仮名1文字の書取能力向上のために漢字1文字単語をキーワードとした訓練の有効性	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 音声言語医学	6. 最初と最後の頁 13-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5112/jjlp.63.13	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤原 加奈江	4. 巻 95
2. 論文標題 発語失行	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 脳神経内科	6. 最初と最後の頁 86-93
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤原 加奈江	4. 巻 37
2. 論文標題 自閉症スペクトラム障害の言語異常のマネージメント	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 JOHNS	6. 最初と最後の頁 633-636
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Hitomi Yazu , Anthony Pak-Hin Kong , Hiroyo Yoshihata , Kimihiro Okubo	4. 巻 36
2. 論文標題 Adaptation and validation of the main concept analysis of spoken discourse by native Japanese adults	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Linguist Phon.	6. 最初と最後の頁 17-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/02699206.2021.1915385	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 小谷 優平, 種村 純	4. 巻 41
2. 論文標題 失語症者向け通所サービス短期的利用の心理社会的側面への有効性 単一被験者の検討	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 高次脳機能研究	6. 最初と最後の頁 427-432
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 時田 春樹	4. 巻 37
2. 論文標題 言語の障害 本が読めなくなってしまった患者(純粹失読)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Brain Nursing	6. 最初と最後の頁 777-781
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Rinus G Verdonschot , Katsuo Tamaoka	4. 巻 online
2. 論文標題 Phonological encoding in Vietnamese: An experimental investigation	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Q J Exp Psychol (Hove)	6. 最初と最後の頁 online
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1177/17470218211053244	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Ju Y, Sambai A, Uno A.	4. 巻 online
2. 論文標題 The influence of orthographic units across Korean children of different ages in Hangul reading.	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Frontiers in Psychology	6. 最初と最後の頁 online
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3389/fpsyg.2022.797874.	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Uema S, Uno A, Hashimoto K, Sambai A.	4. 巻 27
2. 論文標題 A case of acquired phonological dyslexia with selective impairment of Kanji: analysis of reading impairment mechanism using cognitive neuropsychological models for reading	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Neurocase	6. 最初と最後の頁 online
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/13554794.2022.2050406	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 種村 純, 中島 八十一, 植谷 利英	4. 巻 41
2. 論文標題 身体障害を伴わない失語症者の日常生活上の困難に関する実態調査	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 高次脳機能研究	6. 最初と最後の頁 72-77
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 原山 秋, 種村 純	4. 巻 17
2. 論文標題 失語症友の会における団体数の推移と活動方針の変化との関連 計量テキスト分析と質的研究法を用いた検討	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 言語聴覚研究	6. 最初と最後の頁 318-325
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11477/mf.6001200299	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 原山 秋, 種村 純	4. 巻 40
2. 論文標題 失語症友の会の加盟団体数の推移とその関連要因の検討	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 高次脳機能研究	6. 最初と最後の頁 432-436
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.2496/hbfr.40.432	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 安居 和輝, 種村 純	4. 巻 17
2. 論文標題 生活期失語症者のためのQOL尺度の開発	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 言語聴覚研究	6. 最初と最後の頁 106-114
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11477/mf.6001200275	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 種村 純	4. 巻 37
2. 論文標題 成人脳損傷者における認知コミュニケーション障害の諸相	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 コミュニケーション障害学	6. 最初と最後の頁 38-42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宇野 彰	4. 巻 35
2. 論文標題 限局性学習症 神経心理学的評価	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 精神科治療学	6. 最初と最後の頁 134-137
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宇野 彰	4. 巻 68
2. 論文標題 読み書きの困難さとは何か	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 教育と医学	6. 最初と最後の頁 380-388
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高橋 大, 水本 豪, 橋本 幸成, 宇野 彰	4. 巻 61
2. 論文標題 聴覚的理解が可能であった単語においてもLASC errorを認めた表層性失書の1例	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 音声言語医学	6. 最初と最後の頁 258-265
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5112/jjlp.61.258	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 横井 美緒, 三盃 亜美, 宇野 彰	4. 巻 61
2. 論文標題 発達性読み書き障害のある児童および生徒の漢字書字成績に影響する文字属性について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 音声言語医学	6. 最初と最後の頁 171-176
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5112/jjlp.61.171	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金子 真人, 宇野 彰, 春原 則子, 上林 靖子	4. 巻 60
2. 論文標題 ADHDの補助的診断検査としての線画同定課題の有用性	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 小児の精神と神経	6. 最初と最後の頁 163-171
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24782/jsppn.60.2_163	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 辰巳 格, 渡辺 眞澄	4. 巻 93
2. 論文標題 Marshall & Newcombe(1966、1973)の深層失読例	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 脳神経内科	6. 最初と最後の頁 163-171(
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 黒川 容輔, 春原 則子	4. 巻 41
2. 論文標題 軽度失語症の日常における文章読解能力 readability score測定を用いた検討	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 高次脳機能研究	6. 最初と最後の頁 38-44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 春原 則子	4. 巻 2020秋季増刊2020
2. 論文標題 読字と書字の障害 発達性読み書き障害	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 リハビリナース	6. 最初と最後の頁 122-123
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林 千紗, 三盃 亜美, 渡部 敬真, 佐伯 由衣, 大淵 周平	4. 巻 45
2. 論文標題 ダウン症児一例への濁音ひらがな表記に関する視覚法と聴覚法を組み合わせた読み書き指導の有効性	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 障害科学研究	6. 最初と最後の頁 299-314
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 畑添 涼, 小園 真知子, 池崎 寛人, 水本 豪, 入田 真由子	4. 巻 37
2. 論文標題 失語症者のコミュニケーション評価におけるCADLとCADL家族質問紙の評定値の乖離の検討	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 コミュニケーション障害学	6. 最初と最後の頁 90-97
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 塩見 将志, 福永 真哉, 水本 豪, 池野 雅裕, 矢野 実郎, 永見 慎輔, 岩村 健司, 都筑 澄夫	4. 巻 61
2. 論文標題 吃音質問紙による工夫・回避、恐れに対する評価が有効であった成人吃音の1改善例	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 音声言語医学	6. 最初と最後の頁 188-195
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5112/jjlp.61.188	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 畑添 涼, 小園 真知子, 池崎 寛人, 水本 豪, 入田 真由子	4. 巻 17
2. 論文標題 失語症者のコミュニケーション行動の検討	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 言語聴覚研究	6. 最初と最後の頁 96-105
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11477/mf.6001200274	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 時田 春樹, 福永 真哉	4. 巻 30
2. 論文標題 右の頭頂葉出血により漢字の純粹失書と道順障害を呈した一例	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 川崎医療福祉学会誌	6. 最初と最後の頁 693-698
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Aya S Ihara , Akiko Miyazaki , Yukihiro Izawa , Misaki Takayama , Kozo Hanayama , Jun Tanemura	4. 巻 14
2. 論文標題 Enhancement of Facilitation Training for Aphasia by Transcranial Direct Current Stimulation	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Front Hum Neurosci	6. 最初と最後の頁 online
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3389/fnhum.2020.573459	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Hiroki Higuchi , Sunao Iwaki , Akira Uno	4. 巻 online
2. 論文標題 Altered visual character and object recognition in Japanese-speaking adolescents with developmental dyslexia	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Neurosci Lett	6. 最初と最後の頁 online
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.neulet.2020.134841	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kimihiro Nakamura , Tomoe Inomata , Akira Uno	4. 巻 online
2. 論文標題 Left Amygdala Regulates the Cerebral Reading Network During Fast Emotion Word Processing	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Front Psychol	6. 最初と最後の頁 online
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3389/fpsyg.2020.00001	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Huilan Yang , Masahiro Yoshihara , Mariko Nakayama, Giacomo Spinelli, Stephen J Lupker	4. 巻 49
2. 論文標題 Phonological priming effects with same-script primes and targets in the masked priming same-different task	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Mem Cognit	6. 最初と最後の頁 148-162
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3758/s13421-020-01080-y.	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Masahiro Yoshihara , Mariko Nakayama , Rinus G Verdonshot , Yasushi Hino	4. 巻 46
2. 論文標題 The influence of orthography on speech production: Evidence from masked priming in word-naming and picture-naming tasks	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Exp Psychol Learn Mem Cogn	6. 最初と最後の頁 1570-1589
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1037/xlm0000829	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計33件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 種村 純
2. 発表標題 急性期から慢性期にかけての失語症治療
3. 学会等名 第5回日本リハビリテーション医学会秋季学術集会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小副貴博, 種村純, 池野雅裕
2. 発表標題 健常者における漢字形態の構造と要素の認知および想起課題成績の分析
3. 学会等名 第22回日本言語聴覚学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 河村 鐘子, 森田 秋子, 春原 則子, 小林 瑞穂, 大島 規世子
2. 発表標題 発話症状の改善におけるアウェアネスについての検討
3. 学会等名 第22回日本言語聴覚学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大平 佳奈, 吉畑 博代, 小林 久子, 大塚 晃
2. 発表標題 失語症者の就労を促進する要因の分析
3. 学会等名 第47回日本コミュニケーション障害学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 矢頭 瞳, 河野 麻美, 吉畑 博代
2. 発表標題 右半球損傷によるコミュニケーション障害のある人の談話特徴の抽出、日本語版MCAを利用して
3. 学会等名 第47回日本コミュニケーション障害学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 内木 麻莉子, 吉田 敬
2. 発表標題 失語症者の遠隔コミュニケーションについて ビデオ通話を利用したオンライン会の検討
3. 学会等名 第47回日本コミュニケーション障害学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 市本 将也, 吉川 浩平, 時田 春樹, 青木 志郎
2. 発表標題 パーチャット病に起因した脳梗塞で失語症を呈した1例
3. 学会等名 第22回日本言語聴覚学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 横井 美緒, 三盃 亜美, 宇野 彰
2. 発表標題 典型発達児および発達性読み書き障害のある児童における漢字書取成績の発達的变化と書取成績に影響する単語属性について
3. 学会等名 第22回日本言語聴覚学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 安居 和輝, 種村 純
2. 発表標題 失語症デイサービスから友の会へ移行後もQOLが向上した運動性失語の一例 LAQOL-11(Life stage Aphasia Quality Of Life scale-11)による評価
3. 学会等名 第22回日本語聴覚学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山田 那々恵, 沖田 啓子, 板倉 香, 岩田 真由美, 木元 美也子, 本多 留美, 三上 裕子, 水戸 裕香, 蓑田 直子, 山下 真樹, 山田 亜紀子, 吉川 浩平, 時田 春樹
2. 発表標題 オンラインを使用した失語症サロンの支援
3. 学会等名 第22回日本語聴覚学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 市本 将也, 吉川 浩平, 時田 春樹, 青木 志郎
2. 発表標題 ペーチェット病に起因した脳梗塞で失語症を呈した1例
3. 学会等名 第22回日本語聴覚学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 守屋 咲希, 種村 純
2. 発表標題 生活期失語症者に生ずる不適応とその後の経過
3. 学会等名 日本高次脳機能障害学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小割 貴博, 宮崎 泰広, 池野 雅裕, 種村 純
2. 発表標題 實在漢字を不適切に組み合わせた右半球損傷2症例
3. 学会等名 日本高次脳機能障害学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 植谷 利英, 種村 純, 伊澤 幸洋, 太田 信子, 時田 春樹, 戸田 淳氏, 宮崎 彰子, 花山 耕三
2. 発表標題 右大脳半球損傷者に対する談話評価法の検討
3. 学会等名 日本高次脳機能障害学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 井原 綾, 宮崎 彰子, 伊澤 幸洋, 高山 みさき, 花山 耕三, 種村 純
2. 発表標題 失語症の自発話課題における経頭蓋直流電気刺激の効果
3. 学会等名 日本高次脳機能障害学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 井原 綾, 宮崎 彰子, 伊澤 幸洋, 高山 みさき, 花山 耕三, 種村 純
2. 発表標題 経頭蓋直流電気刺激と言語訓練アプリを併用した失語症者の発話改善
3. 学会等名 日本臨床神経生理学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 安居 和輝, 種村 純
2. 発表標題 発症から6年後にQOL向上を認めた重度運動性失語の一例
3. 学会等名 日本言語聴覚学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 池野 美知留, 宮崎 彰子, 種村 純
2. 発表標題 右視床出血後にカテゴリー特異的呼称障害を認めた1症例
3. 学会等名 日本言語聴覚学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小割 貴博, 宮崎 泰広, 池野 雅裕, 種村 純
2. 発表標題 左手書字の自発書字で鏡映文字が頻出した一例
3. 学会等名 日本言語聴覚学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 澁谷 文恵, 宇野 彰
2. 発表標題 日本語話者児童の「ひらがな」と「漢字」における読み困難の出現率について
3. 学会等名 日本高次脳機能障害学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 澁谷 文恵, 宇野 彰
2. 発表標題 日本語話者の中学1年生における英単語読み書き習得度を予測する要素的認知能力について
3. 学会等名 日本言語聴覚学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 渡辺 眞澄, 西河 杏莉, 仁井山 志穂, 辰巳 格
2. 発表標題 日本語の動詞活用に関する基礎的研究
3. 学会等名 日本高次脳機能障害学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 渡辺 眞澄, 山崎 悠貴, 和田 歩美, 辰巳 格
2. 発表標題 仮名語の音読における心像性効果
3. 学会等名 日本高次脳機能障害学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 吉畑 博代, 渡邊 理恵, 杉山 貴子, 伊集院 睦雄, 綿森 淑子
2. 発表標題 失語症総合検査JCATの意味記憶課題と再認記憶課題の作成過程について
3. 学会等名 第46回日本コミュニケーション障害学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 唐澤 健太, 春原 則子, 鈴木 智也
2. 発表標題 重度の非語復唱障害を呈した軽度失語症例における聴覚的理解および音韻機能の分析
3. 学会等名 日本高次脳機能障害学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 高津 亘広, 吉畑 博代, 加藤 孝臣, 浦野 雅世
2. 発表標題 失語症者の動詞の表出における項の移動と項の数の影響
3. 学会等名 第46回日本コミュニケーション障害学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 矢頭 瞳, 吉畑 博代, 大久保 公裕
2. 発表標題 失語のある人の談話評価における日本語版Main Concept Analysisの有用性の検討
3. 学会等名 第46回日本コミュニケーション障害学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 松浦 麻香, 吉田 敬, 堀池 瑞季
2. 発表標題 早口言葉の言い誤りの要因に関する検討 語彙レベルでの誤りに着目して
3. 学会等名 第46回日本コミュニケーション障害学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 桐木 文咲, 山門 美咲, 吉田 敬
2. 発表標題 失語症者におけるタイピングの誤りについて ローマ字タイピングを行う症例を通して
3. 学会等名 第46回日本コミュニケーション障害学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 石井由起、宇野彰、春原則子
2. 発表標題 呼称課題における意味性錯語等の出現に影響する単語属性について
3. 学会等名 日本高次脳機能障害学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 三上 裕子, 沖田 啓子, 板倉 香, 岩田 真由美, 木元 美也子, 本多 留美, 三田 真樹, 水戸 裕香, 蓑田 直子, 山田 亜紀子, 山田 那々恵, 吉川 浩平, 時田 春樹
2. 発表標題 失語症者向け意思疎通支援者養成研修における会話技術の向上について
3. 学会等名 日本言語聴覚学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 市本 将也, 吉川 浩平, 時田 春樹, 松浦 大輔
2. 発表標題 前大脳脳動脈領域の脳梗塞により急性期に無言症を呈した3例の経過報告
3. 学会等名 日本言語聴覚学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 高橋 大, 橋本 幸成, 水本 豪
2. 発表標題 音読所要時間に基づく音韻失読例の文字-音韻変換能力の評価
3. 学会等名 日本言語聴覚学会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	伊集院 睦雄 (Ijuin Mutsuo) (00250192)	県立広島大学・保健福祉学部(三原キャンパス)・教授 (25406)	
研究分担者	田村 至 (Tamura Itaru) (00347783)	北海道医療大学・リハビリテーション科学部・教授 (30110)	
研究分担者	日野 泰志 (Hino Yasushi) (00386567)	早稲田大学・文学学術院・教授 (32689)	
研究分担者	吉畑 博代 (Yoshihata Hiroyo) (20280208)	上智大学・言語科学研究科・教授 (32621)	
研究分担者	藤原 加奈江 (Fujiwara Kanae) (20468325)	東北文化学園大学・健康社会システム研究科・教授 (31310)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	水本 豪 (Mizumoto Go) (20531635)	熊本保健科学大学・保健科学部・准教授 (37409)	
研究分担者	狐塚 順子 (Kozuka Junko) (20735922)	武蔵野大学・人間科学研究所・客員研究員 (32680)	
研究分担者	時田 春樹 (Tokida Haruki) (30804108)	川崎医療福祉大学・リハビリテーション学部・准教授 (35309)	
研究分担者	中山 真里子 (Nakayama Mariko) (40608436)	東北大学・国際文化研究科・准教授 (11301)	
研究分担者	太田 信子 (Ota Nobuko) (50759587)	川崎医療福祉大学・リハビリテーション学部・准教授 (35309)	
研究分担者	渡辺 真澄 (Watanabe Masumi) (60285971)	県立広島大学・保健福祉学部（三原キャンパス）・教授 (25406)	
研究分担者	近藤 公久 (Kondo Tadahisa) (60418548)	工学院大学・情報学部（情報工学部）・教授 (32613)	
研究分担者	三盃 亜美 (Sanbai Ami) (60730281)	筑波大学・人間系・助教 (12102)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	玉岡 賀津雄 (Tamaoka Ktsuo) (70227263)	名古屋大学・人文学研究科・名誉教授 (13901)	
研究分担者	森岡 悦子 (Morioka Etsuko) (70441334)	大阪保健医療大学・大阪保健医療大学・客員教授 (34449)	
研究分担者	春原 則子 (Haruhara Noriko) (70453454)	目白大学・保健医療学部・教授 (32414)	
研究分担者	今泉 敏 (Imaizumi Satoshi) (80122018)	東京医療学院大学・保健医療学部・教授 (32823)	
研究分担者	石井 由起 (Ishii Yuki) (80878372)	東北文化学園大学・医療福祉学部・講師 (31310)	
研究分担者	吉田 敬 (Yoshida Takashi) (90387837)	愛知淑徳大学・健康医療科学部・教授 (33921)	
研究分担者	宇野 彰 (Uno Akira) (10270688)	筑波大学・人間系・客員研究員 (12102)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------